(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2006-104596
(P2006-104596A)
(43)公開日　平成18年4月20日(2006.4.20)

(51)Int.Cl.	F I	テーマコード（参考）
A41G 3/00 (2006.01)	A41G 3/00 N	

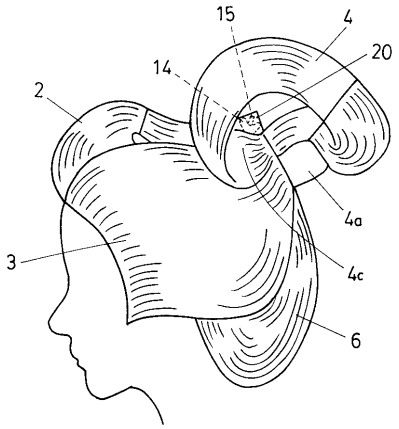
審査請求 未請求　請求項の数 2　ＯＬ　（全 7 頁）

(21)出願番号　特願2004-290480 (P2004-290480)
(22)出願日　平成16年10月1日 (2004.10.1)

(71)出願人　591089464
株式会社ファニー
東京都荒川区東日暮里２丁目３２番１３号
(74)代理人　100080931
弁理士　大澤　敬
(72)発明者　早川　英雄
東京都荒川区東日暮里２丁目３２番１３号

(54)【発明の名称】日本髪かつら

(57)【要約】
【課題】　熟練した結髪師を必要とせずに美しい髪型の日本髪かつらを安価で造ることができ、髪に型崩れが生じたとしても、それを簡単に直せるようにする。
【解決手段】　かつら枠の外側に、前髪２と、左右の鬢３，３と、髷４とを取り付けると共に、たぼ金に髻６を取り付ける。そして、その髻６をたぼ金と共にかつら枠１に対して着脱可能にする。その髻６は、加工後に柔軟性を有する成形部材であるウレタン樹脂で、表面の髪の櫛目まで一体に成形により形成する。それにより、髻６を作るために熟練した結髪師が髪を結いあげる必要がなくなる。また、髻６はウレタン樹脂製であるため、それがへこむなどして型崩れしたとしても、結髪師を必要とせずにその型崩れを簡単に直すことができる。
【選択図】　図１



【特許請求の範囲】
【請求項１】
髷と髷の少なくとも一方をかつら枠に対して着脱可能に取り付け、その着脱可能とした髷あるいは髷、またはその両方を加工後に柔軟性を有する成形部材で髪の櫛目まで一体に成形により形成したことを特徴とする日本髪かつら。
【請求項２】
前記成形部材はウレタン樹脂であることを特徴とする請求項１記載の日本髪かつら。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
この発明は、結婚式における花嫁などが頭部に着用する日本髪かつらに関する。
【背景技術】
【０００２】
従来、花嫁などが頭部につける日本髪かつらは、例えば特許文献１に記載されているように、頭部に沿う形状に形成した台枠（かつら枠）に、前髪、左右の鬢（びん）、後部上方の髷（まげ）、その下から襟首近くまで垂れ下がる髷（たぼ）等を取り付けることにより構成されている。
このような日本髪かつらは、例えば髷の部分を作るときは、まず布地に人毛あるいは人工毛髪（例えば化繊）を職人の手により髷を形成するのに必要な本数だけ植毛する。また、髷を取り付けるためのたぼ金を金属等で形成し、それを上述した植毛済の布地の髪と反対側の面に接着剤（ボンド等）により貼り付ける。
次に、そのたぼ金と一体になった髷用の毛髪を、かつら枠にたぼ金部分をネジ等により固定して取り付け、その後で髪の部分に油を付け、それを結髪師が日本髪用の所定の髷形状に結いあげる。また、同様にかつら枠にそれぞれ取り付けた毛髪部分も結いあげて、左右の鬢、前髪、髷を形成する。それにより、日本髪かつらが完成する。
【特許文献１】特公平７－９１６８２号公報
【発明の開示】
【発明が解決しようとする課題】
【０００３】
しかしながら、このような従来の日本髪かつらは、上述したようにかつら枠に髷、鬢、前髪、髷に対応させて分け取りした髪をそれぞれ取り付け、それを熟練した結髪師が形の美しい日本髪になるように手作業で結いあげていたので、かつらとして完成させるまでには大変な労力を要し、コスト的にも高価なものになってしまうということがあった。
また、日本髪かつらは、上述したように髪の部分に油を付けて形を整えているため、それにより膨らました髪の毛の内側部分は空洞状態になっている。したがって、かつらを頭部に被せる際に誤って、その整えられた髪の部分に手などが触れてしまったときには、それが型崩れしやすいということがあった。特に、日本髪かつらの場合には、それを頭部に被せる際に髷の部分が変形して型崩れが生じやすかった。
【０００４】
このような型崩れが生じてしまったときには、従来の日本髪かつらの場合には、結いあげた髪の毛を元の状態に一度ばらした後に、それを再び結いあげる必要があったが、このような結い直しは熟練した結髪師でないと元の美しい形の日本髪にはならないので、それがすぐにはできないことがあった。
この発明は、上記の問題点に鑑みてなされたものであり、熟練した結髪師を必要とすることなしに美しい髪型にすることができ、その髪部分に手等を触れて型崩れを生じさせてしまったときでも、それを熟練した結髪師を必要とすることなしに簡単に直すことができる日本髪かつらを安価で提供することができるようにすることを目的とする。
【課題を解決するための手段】
【０００５】
この発明は上記の目的を達成するため、髷と髷の少なくとも一方をかつら枠に対して着

脱可能に取り付け、その着脱可能とした髷あるいは髯、またはその両方を加工後に柔軟性を有する成形部材で髪の櫛目まで一体に成形により形成した日本髪かつらを提供する。

その成形部材は、ウレタン樹脂にするとよい。

【発明の効果】

【０００６】

この発明による日本髪かつらによれば、髷と髯の少なくとも一方はかつら枠に対して着脱可能であって、その髷あるいは髯、またはその両方は加工後に柔軟性を有する成形部材で髪の櫛目まで一体に成形により形成されているので、それらを熟練した結髪師が結いあげる必要がない分だけ安価に製作することができる。

また、櫛目の部分まで一体成形で形成されているので、そこに手等を触れたとしても型崩れしにくい。また、仮にへこむなどして変形したとしても、熟練した結髪師を必要とせずにそれを簡単に元の美しい髪型に直すことができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【０００７】

以下、この発明を実施するための最良の形態を図面に基づいて説明する。

図１はこの発明の一実施例である日本髪かつらを女性の頭部に被せた状態で示す側面図、図２は同じくその日本髪かつらの着脱可能な髷を示す斜視図、図３は同じくその日本髪かつらの着脱可能な髯を示す側面図、図４は同じくその日本髪かつらの髷や髯を取り付けるかつら枠を示す側面図である。

この日本髪かつらは、図４に示すかつら枠１の外側の前方頂部（同図で左方）１ａに図１に示すように前髪２を、左右のもみあげ部１ｂ，１ｂに各鬢（びん）３を、後方頂部１ｃに髯（まげ）４を、たぼ金５に髷（たぼ）６をそれぞれ取り付けることにより形成している。

【０００８】

このように、髷６はたぼ金５を介してかつら枠１に、また髯４はかつら枠１の後方頂部１ｃにそれぞれ着脱可能に取り付けられるようになっているが（その一方だけを着脱可能にしてもよい）、髷６は加工後に柔軟性を有する成形部材であるウレタン樹脂で、図２に示すように表面が髪の櫛目まで一体に成形により形成されている。

その髷６を形成しているウレタン樹脂は、その厚さを例えば３～８ｍｍ程度にして図２に示したような、あたかも熟練した結髪師が結いあげたような美しい髷形状に成形している。したがって、内側は空洞状態であるため非常に軽い。

【０００９】

また、そのウレタン樹脂は、適度な弾性を有する部材であるため、髷６の一部に手などによって外力が加えられることにより一部が凹状に変形して窪んだとしても、その外力が加えられなくなれば、材料自身の持つ復元力（弾性力）により、すぐに元の状態に戻る。

また、このウレタン樹脂は、その表面の着色も容易であるため、髷６の表面の櫛目部分を、人毛と見分けがつかない程度にまで着色することができる。

【００１０】

髯４は、図３に示すような根４ａを含む状態でかつら枠１（図４）から取外しが可能であり、髪の毛の部分は、この実施例では例えば化繊である人工毛髪を使用して、それを図示のような形に結いあげている。そして、この髯４は、図４に示したようにかつら枠１の後方頂部１ｃに取付プレート７を介して一体に固定しているＵ字状金具８の部分に根４ａの部分が嵌め込まれてねじ止め固定されるが、その固定方法についての詳しい説明は後述する。

なお、この髯４は、髷６と同様にウレタン樹脂で形成し、それを図３に示した形状に髪の櫛目まで一体に成形により形成するようにしてもよい。そうすれば、人工毛髪を結いあげる手間が省けるので、かつら全体をより安価に製造することができる。

その場合、材料として使用する成形部材は、加工後に柔軟性を有する成形部材としてウレタン樹脂の他に、ポリエステル等も使用することができる。

【００１１】

図１に示した前髪２は、かつら枠１（図４）に接着により固定する。したがって、前髪２は、かつら枠１から取り外すことができないようになっている。また、左右の各鬢３，３も、その前方部分（図１で左方側）をかつら枠１に接着により固定しているので、それらをかつら枠１から完全には（全体は）取り外すことができないようになっている。但し、各鬢３，３のそれぞれ後方部分は、かつら枠１に図示を省略しているマジックテープ（登録商標）により着脱可能にしているので、髷６を取り外す際には鬢３の後方部分をかつら枠１から部分的に取り外すことにより、髷６の取り外しを容易に行うことができる。

【００１２】

髷６は、そこに図５に示すようにたぼ金５の両端部を小ネジ９により固定している。そして、その状態で、たぼ金５の両端部を図４に示したかつら枠１の固定ネジ１３がある位置となる支点部に取り付けることにより、かつら枠１に装着するようになっている。

そのたぼ金５は、薄板状の弾性を有する金属板からなり、図５に示したように両端部にはそれぞれＬ字部５ａと、長孔５ｂと、固定用孔５ｃがそれぞれ形成されている。また、髷６のあがき（回動）動作を可能するためのネジリコイルバネ１２を、それぞれ両端部に取り付けている。

さらに、このたぼ金５は、その中央側の頭部に接する部分に、布１０を接着により一様に貼付し、それによりかつらをかぶった際の装着感を高めるようにしている。

【００１３】

このたぼ金５の両端部の髷６への固定は、左右の各固定用孔５ｃ，５ｃを、それに対応させて髷６の内面側に形成している固定用穴部６ｃ，６ｃ（図２参照）にそれぞれ一致させ、そこに小ネジ９をそれぞれ挿入することにより行う。その各固定用穴部６ｃの奥には、髷６の表面に突出しない深さの位置に固定用ナット板がそれぞれインサートモールドにより予め埋め込まれている。したがって、各固定用孔５ｃに挿入した各小ネジ９を固定ナット板の各雌ネジ孔に螺着すれば、たぼ金５の両端部を髷６にしっかりと固定することができる。

【００１４】

そして、このたぼ金５と一体にした髷６をかつら枠１に取り付けるには、図４に示したようにたぼ金５の両端部の長孔５ｂ，５ｂに固定ネジ１３，１３を挿入して、それをかつら枠１に形成しているネジ孔に螺着する。また、両側のネジリコイルバネ１２の一端を、それぞれかつら枠１に取り付ける。それにより、髷６（図４には図示されていないので図１及び図２を参照）が矢示Ａ方向にあがき（回動）可能になる。

次に、図６に示すように髷６の上部の髷Ｕ字部６ａ（図２も参照）の内面を、かつら枠１の上部に固定しているＵ字状金具８のＵ字部外面に沿わせ、その状態で２箇所の溝６ｂ（図２に明示）に固定用ゴム輪１１を嵌め込んで、その固定用ゴム輪１１をかつら枠１の取付プレート７に固定されてＵ字状金具８から間隔を追いた前方に略垂直に設けられているネジ１５に引っ掛ける。そうすることで、髷６の上部がかつら枠１に固定される。

【００１５】

また、図３に示した髷４のかつら枠１への取り付けは、その髷４の根４ａの内部には図７に示すように空洞部１６が形成されているので、その空洞部１６に図４に示したかつら枠１のＵ字状金具８が入り込むようにする。そして、その際に図７に示すように根４ａと一体の固定板２１に形成されている長孔２１ａ内に図４に示したネジ１５が入り込むようにする。

そして、その状態で、かつら枠１の内側から図６に示したようにネジ１７をかつら枠１に形成している孔に差し込んで、そのネジ１７を図７に示したように根４ａの内部に形成しているネジ固定用のナット孔４ｂに螺着する。それにより、髷４の根４ａの部分がかつら枠１にしっかりと固定される。

【００１６】

さらに、髷４の前部のぐらつきを防止するため、固定板２１の長孔２１ａに挿入した状態にあって、図１に示したように髷４の下部４ｃに挿入された状態にあるネジ１５に蝶ネジ１４を螺着し、髷４の前部側も固定する。そして、その蝶ネジ１４を覆うように、その

上に黒色の和紙２０をボンドにより貼り付けて蝶ネジ１４が外部から見えないようにする。

最後に、左右の各鬢３，３のフリー側である後部（図１で右方）を、その各内側に設けられているマジックテープ（登録商標）により、かつら枠１に固定する。そうすれば、図１に示したような日本髪かつらが完成する。

なお、髷４や髻６をかつら枠１から取り外すときには、上述した場合と逆の手順で作業を行えば、それらを簡単に取り外すことができる。

【００１７】

このように、この実施例による日本髪かつらによれば、髻６と髷４（そのいずれか一方にしてもよい）がかつら枠に対して共に着脱可能であるので、その髻６や髷４の型崩れを直したいときには、かつらを構成している全ての髪を一度ばらすようなことをせずに、髻６や髷４を単体で個別にかつら枠１から取り外して、それらの型崩れを簡単に直すことができる。

また、髻６は加工後において柔軟性を有する成形部材（ウレタン樹脂）で髪の櫛目まで一体に成形により形成されているので、それらを熟練した結髪師が結いあげる必要がない分だけそれを安価に製作することができる。さらに、そのウレタン樹脂は軽いので装着感も良好である。

【００１８】

そして、その髻６は櫛目の部分までウレタン樹脂により一体成形されていて、そこには人毛あるいは人工毛髪を一切使用していないので、その髻６の表面に万一手等を触れることによりそれを型崩れ（へこみ）させてしまったとしても、それは材料自身が持つ復元力（弾性力）によりすぐに元の美しい形に戻る。

したがって、従来の人毛あるいは人工毛髪を使用した髻のように、型崩れした髻の髪の毛を一旦ばらした後に熟練した結髪師が再び結いあげるようなことをしなくても済むので、型崩れした際の扱いが非常に容易である。

【産業上の利用可能性】

【００１９】

この発明は、安価であって型崩れしにくい日本髪かつらとして、広く適用することができる。

【図面の簡単な説明】

【００２０】

【図１】この発明の一実施例である日本髪かつらを女性の頭部に被せた状態で示す側面図である。

【図２】同じくその日本髪かつらの着脱可能な髻を示す斜視図である。

【図３】同じくその日本髪かつらの着脱可能な髷を示す側面図である。

【図４】同じくその日本髪かつらの髻や髷を取り付けるかつら枠を示す側面図である。

【図５】図２の髻の内側にたぼ金を取り付けた状態を示す斜視図である。

【図６】図１の日本髪かつらで髷を取り外した状態を示す平面図である。

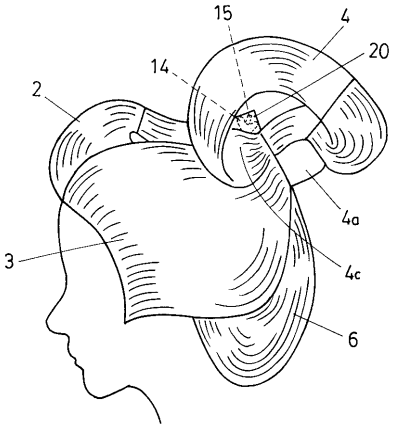
【図７】髷の根の部分の内側を示す下面図である。

【符号の説明】

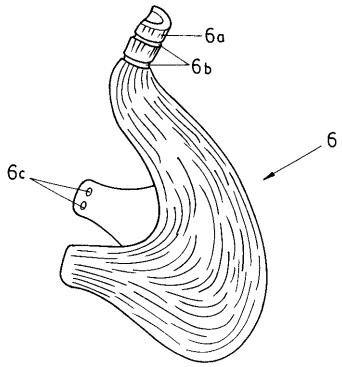
【００２１】

１：かつら枠　　３：鬢　　４：髷　　５：たぼ金　　６：髻

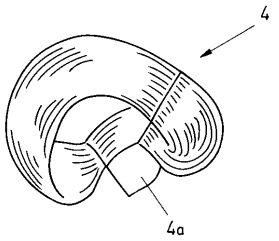
【図１】



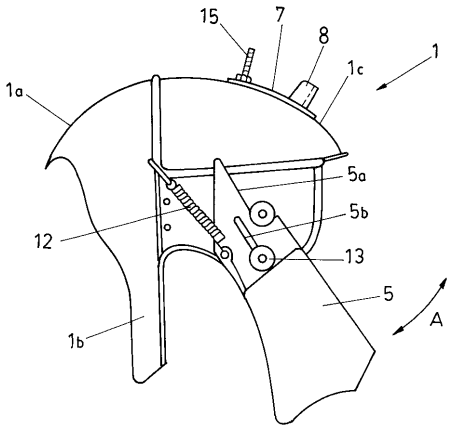
【図２】



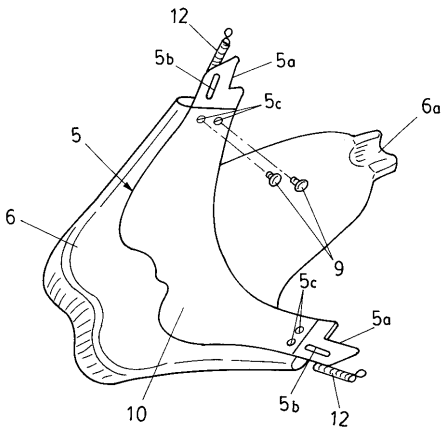
【図３】



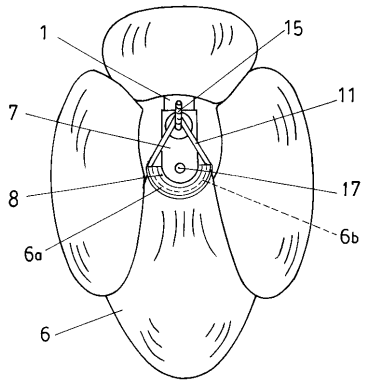
【図４】



【図５】



【図６】



【図７】

